夢ヲ歩ク

賽乃目祀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢ヲ歩ク

【Ｎコード】
Ｎ２７３８ＢＡ

【作者名】
賽乃目祀

【あらすじ】
夢は繋がる。
互いの思いに感応して。
少女・窓付きが、青年・くいつきの夢を歩いて感じとるのは……――？

夢は繋がる（前書き）

前作とは文法が変わっています。
楽しんで頂けたら幸いです。

夢は繋がる

「先生、ピアノ弾いて」
三つ編みの少女が、言った。
「良いですよ。何を弾きましょう？」
先生と呼ばれた黒づくめの男性は、少女に聞いた。
「何でもいいよ」
「分かりました。では、窓付きさんの好きな曲を」
そう言うと、先生はゆったりとしたメロディを奏で始めた。
窓付きと呼ばれた少女は、部屋の中央のテーブルへ向かい、椅子に座った。
「窓付きってば、我が物顔ね。他人の家なのに」
そう言いながら、窓付きの向かいの椅子に座った白い肌の黒髪少女に、
「モノ江だって人の事言えないじゃん」
と、窓付きが突っ込みを入れる。
黒髪の少女・モノ江は、わざと聞こえないふりをした。
「あなたも、こちらへ来られてはいかがですか？」
ピアノを弾きながら、先生が部屋の入口に向かって声をかけた。
少しの間の後、
「……いい」
と、声が返ってきた。
「そうですか」
先生はそれ以上何も言わず、静かなメロディを奏で続けた。
代わりに窓付きが喋る。
「何もないけど、ゆっくりしてね」
するとまた、数秒の間を置いて、
「……ああ」
とだけ返事が返ってきて、会話が終了してしまった。

先生の奏でるピアノの音色だけがしばらく部屋に響いたところで、
「しかし、あれよね。ほんと物好きよね」
唐突にモノ江が口を開いた。
それに窓付きが反応する。
「何が？」
「あなたじゃないわよ」
言ってモノ江は、今度は後ろを見て言った。
「あなたの事よ。くいつき」
そこにいたのは、青い髪と包帯が目立つ青年だった。
くいつきと呼ばれた青年は、黙ってモノ江を見た。
モノ江は気にせず続ける。
「毎日毎日飽きもせずに、この世界に来るんだもの。あなたにも、あなたの世界があるんじゃないの？」
モノ江はどこか呆れたように言う。
世界とは、夢の中の世界の事である。
意味はそのままで、モノ江達がいるのは、窓付きの夢の世界。また、モノ江や先生は窓付きの夢の世界の住人なのだ。
「普通なら、窓付き以外の人間がここに来る事なんて有り得ないのよ？ましてやあなたたち、現実で会ったことすらないんでしょ？ますます有り得ないわ」
『あなたたち』の所で、窓付きとくいつきを交互に見ながらモノ江は言った。
くいつきは何も答えない。
「まぁでも、楽しいし良いんじゃないかな？」
空気に耐えかねた窓付きがそう言うと、モノ江は大きなため息を吐いた。
「…もういいわ。真面目に言った私が馬鹿だった」
その言葉に、窓付きがムッとして言い返す。
「私だって真面目に言ったよ！」
「はいはい」

「もー！」
「あなたは牛なの？」
「違うよっ！」
と、窓付きとモノ江が数回言葉を交わすと、急にピアノのメロディが止まった。
窓付きとモノ江が同時に先生を見ると、先生はピアノの上にある窓を見上げている。
「どうしたの先生？」
窓付きが近づいて聞くと、先生は、
「いえ…外の様子が、なんだかおかしくて……」
「外？」
言われて外を見ると、いつもは星空が見えるはずなのに、真っ暗になっている。
「さっきまでは、ちゃんと星が見えていたのに…」
先生が不思議そうに言う。
「出てみよっか」
窓付きが言うと、
「私も行くわ」
「……俺も行く」
モノ江とくいつきも名乗り出た。
「危険だと思ったら、すぐに戻ってきて下さいね」
「分かった！」
先生の言葉に元気よく返事を返すと、窓付きはゆっくりと部屋の扉を開いた。

夢は繋がる（後書き）

続きます。

この回は繋ぎの回で、次からがお話としては本編となります。

誰の夢？（前書き）

モノ江がよく喋ります。

誰の夢？

「ここは……」
部屋を出た窓付き達が見たのは、
「学校…の、教室？」
薄暗く、どこか陰湿な空気が漂っているが、そこは確かに一般的な学校の教室に似た場所だった。
均等に机や椅子が並べられ、部屋の前後に黒板がある。
「おかしいわ……部屋の外は、こんな場所じゃなかった」
モノ江はそう言うと、側にあった机を掴み、
「んんっ……」
動かそうと力を入れるが、机は微動だにしない。
「ダメね…全然動かないわ。固定されてるみたい」
窓付きも椅子を持ち上げようとしたが、同じように動かなかったのか、諦めた。

今度は窓の外を確認する。くいつきが廊下側。窓付きとモノ江がその反対側を確かめる。
「何も見えないね」
窓付きが呟いた。
「そうね。真っ暗で確認のしようがないわ。…そっちはどう？」
モノ江がくいつきを振り返る。
「……暗くて見えないけど、何かいる」
「何かって？」
窓付きが聞き返すと、
「…黒くて、顔のとこだけ白くて、スライムっぽい」
「うぇ、なにそれ」
それを聞いて、モノ江はあからさまに嫌そうな顔をした。
「暗くて見えないなら、電気つけちゃおうよ」

窓付きが教室の前にあった蛍光灯のスイッチに触れようとした瞬間、
「…やめた方がいい」

パチッ。

くいつきが言ったのとほぼ同時に、窓付きはスイッチを押して電気をつけた。
「…え？」
窓付きはぽかんとして、くいつきを見た。
「……来るぞ」
ぽつりと言うと、くいつきは窓付きの手を掴み、引き寄せた。
その瞬間、教室の扉が開き、黒い影のような化け物が入ってきた。
ぐにゃぐにゃと体をくねらせながら前進し、白い顔をキョロキョロさせて教室の中を見回す。
「いやぁっ！なにこれ！？」
モノ江が悲鳴を上げる。
すると黒い化け物は、ぐるんと顔を回して、モノ江に向かって走ってきた。
「…部屋に戻るぞ」
言うが速いか、くいつきは窓付きを引っ張って部屋の入口に走った。
「モノ江！部屋に逃げて！」
窓付きは立ち竦んでいたモノ江に叫んだ。
「っ！」
入口に近かったモノ江は、化け物に捕まる寸でのところで部屋に飛び込んだ。
窓付きもそれに続いて走り込み、最後にくいつきが入ると、素早く扉を閉めた。
入ってくる気配はない。
そこでようやく、窓付きとモノ江は安堵の息をはいた。
「ど、どうしたんですか？」

その様子を見て、先生が心配そうに声を掛けてきた。
「先生…実は…」
窓付きは、部屋の外で見たことや起きた事を先生に話した。

「…そんな事が……」
話を聞き終わった先生は、難しい顔をして黙った。
「そもそも、ここどこなのよ？」
「分かんない。でも、少なくとも私の夢の世界じゃないよ」
モノ江の問いに、窓付きが答える。
「私達、帰れるわよね？」
「どうだろ……。私が起きたら、元の世界に戻れるかも」
そう言うと、窓付きは自分の頬をグイッとつねった。
頬をつねるのは、窓付きが夢から醒めるのに不可欠な行為なのだ。
しかし―……。
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

グイッ。

「……」
「……」
「……」
「……あれ？」
窓付きは首を傾げた。
そして、
「…えっと……起きられない」
「嘘でしょ…」
がくりとモノ江が項垂れる。

「じゃあずっとここにいなくちゃいけないの…！？」
「うーん……でも、慣れたら楽しいかもしれないよ？」
窓付きがいつもの気楽な発言をすると、モノ江はキッと睨んで言った。
「慣れるわけないじゃないあんな化け物！鳥人間の方がまだマシだわ！」
鳥人間とは、モノ江や先生と同じ夢の住人の事である。体は人間だが、鳥のような顔をしている為そう呼ばれている。
彼女（？）達は、窓付きを見ると追いかけ回すのだが、捕まって殺されたりするわけでもない。端から見れば鬼ごっこのようなものなのだが。
「あれは、ダメよ。本能が危険だって言ってるわ」
あれとは、黒い化け物の事だろう。
窓付きも、化け物が教室に入ってきた瞬間に感じた。
言い様のない恐怖。不安。
「……」
一瞬、脳裏に化け物の姿が浮かび、窓付きはぶるるっと身震いをした。
「…じゃあどうするの？ずっとここにいるの？」
「わ、私に聞かないでよ…」
窓付きとモノ江が黙ると、途端に沈黙が訪れた。
やや重苦しい空気が流れる。と、
「…ちょっと良いですか？」
今まで黙り込んでいた先生が口を開いた。
全員が先生を見る。
「僕が思うに、ここは…くいつき君の夢の世界じゃないでしょうか？」
「！」
窓付きはハッとした。
確かに、初めてにしては化け物の対処も早かったし、そういえば電

気をつけると化け物が来る事も知っていたようだ。
くいつきを見ると、床を見つめたまま黙っている。
「そうなの？くいつき」
モノ江が詰め寄ると、くいつきは小さく溜め息をついて、
「……ああ」
と、短く答えた。
「なら早く元の世界に帰してよ！あなたが私達をここに連れてきたんでしょう？」
いつになく感情的になっているモノ江が言う。
くいつきはまた黙った。
「僕からもお願いします」
先生が言うと、くいつきは少しだけ眉を寄せた。
「……知らない」
「え？」
「……俺は知らない。あんた達を連れてきたのは、俺じゃない」
そして、最後に彼が呟いた言葉を、窓付きは聞き逃さなかった。
その時の、どこか苦し気な表情も。

「……こんな所に連れてくる気なんて、なかった」

誰の夢？（後書き）

次話は新たなキャラクター（オリジナル）が登場します。

予定です。

夢の住人（前書き）

夢を歩く回です。
今回は窓付きがよく喋ります。

夢の住人

「みんな準備できたー？」
「あら、先生も来るの？」
「はい、皆さんに何かあったら困るので」
「先生がいれば百人力だね！」
「そうかしら？あ、でもそうね。化け物を撒くための囮にはなりそう」
「あはは…。…いえ、僕も逃げますよ？」
窓付き、モノ江、先生がいつもの調子で会話をする。「忘れ物ないよね。じゃあ行こっか！」
言って、窓付きは部屋の扉を開いた。

「お待たせ！くいつき！」
部屋の外で待っていたくいつきに、窓付きが声をかける。
「……本当に行くのか？」
くいつきがどこか嫌そうに聞く。
「行くよ？だってせっかくくいつきの夢と繋がれたんだもん！探検しなくちゃ」
窓付きは楽しそうに答えて、にこにこと笑う。
遅れてモノ江と先生が出てくると、くいつきは諦めたようにため息を吐いた。
そして、
「……そんな楽しいものなんて、ないのに」
と、誰にも聞こえない声で呟いた。

「……ほんとに行くぞ」
「うん！」
窓付きが元気良く返事をする。

小さく息をつくと、くいつきは普通に教室の扉を開いた。と、
「きゃあぁ！？」
突然モノ江が悲鳴をあげた。
「！？」
窓付きも先生も驚いて目を見張る。
扉を開けた先の薄暗闇に、ぽつんと少女が立っていたのだ。
少女は何故か頭に花と芽を生やし、意味もなく微笑を浮かべている。
「……」
少女の黒目がちな瞳が、窓付き達を捉える。
すると、
「―……くーちゃん！」
微笑から満面の笑みに変わった少女が駆け寄ってきて、くいつきに抱きついた。
「え……？」
窓付き達が呆然とその光景を見つめる中、
「……いい加減にしろよ」
やや怒気を含めた口調でくいつきが言うまで、ずっと少女は離れなかった。

「はじめまして。わたし、はな子っていいます。この世界…くーちゃんの夢の住人です」
一度教室の中へ入って落ち着くことになり、少女が自己紹介をする。
「くーちゃんっていうのは？」
「あ、彼…くいつき君の事だよ」
「はな子って本名なの？」
「ううん、くーちゃんがつけてくれたの」
窓付きの質問に、はな子が軽快に答えていく。
化け物のように恐怖などは微塵も感じない。むしろ、モノ江や先生と近い感じがする。
窓付きは短時間の内に、すっかりはな子と打ち解けた。

「うふふっ、窓ちゃんって面白いね」
「はな子ちゃんも楽しいよ！」

「……今更な気もするけど、この世界の事を簡単に説明しとく」
はな子と窓付き達が仲良くなったところで、くいつきが立ち上がり
黒板に何か書き始めた。
「……これが、この世界の大まかな図」
そこには、校舎の見取り図が細かく書かれていた。
「うわあ…よく覚えてるわね、こんな細かいの」
モノ江が驚いたように言う。
「もっと大雑把な性格かと思ってたわ」
「……悪かったな」
くいつきが少し口を尖らせて言うと、
「……ん？」
見取り図を眺めていた先生が、首を傾げた。
「…どうした、先生？」
「この図、所々空白がありますが……」
「……ああ、入った事がない場所は、空白にしてる」
くいつきが説明をし始める。
「…俺達が今いる場所は、南校舎一階の１Ａの教室。この南校舎は
三階まであって、どの階も教室は三つある」
見取り図には、
『１Ａ』、
『１Ｂ』、
『２Ａ』、
『２Ｂ』、
『２Ｃ』、
『３Ａ』、
『３Ｂ』、
『３Ｃ』が書かれている。

「あれ？１Ｃは？」
窓付きが聞くと、
「その教室は開かないの」
くいつきの代わりに、はな子が答えた。
「どうして？」
「どうしてかな？うふふ、わたしも分からないの」
微笑を浮かべて、はな子は言った。
「この、北校舎というのは？」
「…北校舎は、南校舎の反対にある。北校舎に行くには、この渡り廊下を通るしかない」
先生の質問に答えながら、くいつきは北校舎と南校舎の間にある一本の道を差した。
「…北校舎は四階まであって、一番上は屋上になってる。行ける場所は全部で九つ」
北校舎の見取り図には、
一階に『職員室』、
『校長室』、
『更衣室』。
二階に『コンピュータ室』、
『購買』。
三階に『音楽室』、
『美術室』。
四階に『生徒会室』。
一番上に『屋上』と書かれている。
「すごいわね、こんなにたくさん」
モノ江が呟くように言う。
「ねえ、はな子ちゃん以外にも住人っているの？」
不意に窓付きが、はな子に訊ねた。
「いるよ？たくさん」
「そっか…」

言って数秒黙ると、窓付きはパッと顔を上げ、
「ねえくいつき！私、他の夢の住人の人達に会いたい！」
「…はあ？」
くいつきが呆れたような声を出す。
「……何で。こいつだけで十分だろ」
言いながらくいつきは、はな子を差した。
「はな子ちゃん以外にも会いたいの！くいつきだって、モノ江と先生に会ってるでしょ？せめてあと一人紹介してよ」
「……」
あからさまに嫌そうな顔をしたくいつきだったが、
「会いたいよーお話したいよー仲良くなりたいよー！」
頑なに駄々を捏ねる窓付きに、しぶしぶ折れた。
「やったっ！」
窓付きは嬉しそうに笑う。
「それで、どこへ行くの？」
モノ江が聞く。
「……屋上を目指す。その間に、大体の住人には会える」
扉に手をかけながら、くいつきは答えた。
「楽しみだなー！ね、モノ江、先生！」
「まぁ、そうね」
「はい」

「……うふふ」
はな子はそれを見ながら、静かに微笑んだ。

目的地である屋上に着くまで、窓付き達は多くの住人達に出会った。
顔に口しかない子供や、頭と腕が繋がった少年。窓の外をじっと見ている三つ編みの少女に、ただ静かにこちらを見つめる女性。

廊下に落書きをしている一つ目の子。機器に囲まれた部屋にいた双子など。
窓付きが言葉をかけても答えない者はいたが、ほとんどは歓迎の言葉や笑顔を返した。
「くいつきの知り合い？」
「友達だよ！」
「そうか。ようこそ、この世界へ」
住人は皆温かく親しみやすかったが、
「それじゃ、サヨナラ」
それぞれの言葉が帯びた雰囲気は、どれも深い悲哀に満ちていた。

特に、屋上にいた足の無い青年は、
「……」
窓付きは、かける言葉が見つからなかった。
彼の纏う悲しみが痛いほど窓付きに突き刺さる。
「…そろそろ、戻りましょう」
先生がそう言わなければ、恐らく窓付きは泣き出していた。

教室へ帰るまでの間、窓付きはずっと思い返していた。
この世界の事。
住人達の事。
そして、この夢を見ている人物の事。

前を歩く青年の背中が、窓付きには、この世界の住人によく似ているように見えた。

夢の住人（後書き）

説明が無駄に長くなって分かりにくくなってしまいました。
申し訳ありません。

そして恐らく次回が最終話になるかと思います。
どうぞ最後までお付き合い下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2738ba/

夢ヲ歩ク

2012年1月13日01時50分発行